

(一) 古文書翻刻紹介

① 文政四年(一八二二)『やたい稽古井中入等記帳』

上町・七津屋所蔵

当町内の屋台の稽古、屋台・曳山の中入りの担当者の記録。中入り

は曳山・屋台を引き廻す際の休憩所担当のこと。この古文書と一緒に、

注を附した解説文が保管されている。以下の翻刻は、それをもとにし、

わずかに修正した。なお、次の②の史料の「中入り・夜喰」は、神輿巡

幸の休憩所や夜食提供のことで、本史料の「中入」とは別。

一つの町の記録であるが、祭礼全体について、いまのところ最も古

い確実な記録であり、また長期にわたる年代記として貴重な史料である。

〔表紙〕

文政四年(一八二二)

やたい稽古井中入等記帳

巳四月十八日 上街ノ連中

〔本文〕

やたい稽古之義ハ四月二十五日之晩より可仕候事、尤番繰ニ而宿仕候ハ

ハ可然哉と定可申候事、賄之儀ハ茶ヲ壺ツ入ても可然候、御宿番繰之儀

ハ、中間衆相談之上ニ而仕候ハバ可然之事

文政四年巳四月、改之置のみ

〔天保十三年(一八四二) 寅迄、凡二十二年ニ成□□〕(追記)

(文政四年・一八二二)

巳年 豊蔵

清六

吉三郎

小右衛門

(文政五年・一八二三)

午年 庄右衛門

兵左衛門

三右衛門

六次郎

✂

(文政六年・一八二三)

未年 伝右衛門

甚蔵

七郎兵衛

源兵衛

✂

(文政七年・一八二四)

申歳 伊左衛門

源右衛門

✂

(文政八年・一八二五)

酉歳 当歳ハ山・やたい出不申候事

✂

(文政九年・一八二六)

戌歳 清兵衛

三郎右衛門

源四郎

久六

嘉助

（文政十年・一八二七）

亥歳 当歳ハ山・やたい出不申候事

（文政十一年・一八二八）

子歳 当年もやま・やたい出不申候事

（文政十二年・一八二九）

丑歳 当歳も山・やたい出不申候事

（天保元年・一八三〇）

寅年 当年ハ、やたい計

清六

豊蔵

（天保二年・一八三二）

卯歳 伊左衛門

甚蔵

吉三郎

（天保三年・一八三三。天保飢饉発生）

辰歳 源右衛門

七郎兵衛

源兵衛

三郎右衛門

（天保四年・一八三三）

巳年 当歳ハ御巡見迄も無之候事

（天保五年・一八三四）

午年ハ御巡見さへ漸々二日ニ相極、中入さい無之位之分にして、本殿寺（野尻法厳寺）殿歩ニ而諸道具等迄軽き、甚夕淋しく御巡見之事、尤山・やたい之義ハ及申す事

（天保六年・一八三五）

未年 当年ハ山は町内際ニ築山ニして、やたい計、四町へ運ふ

佐助

善助

（天保七年・一八三六）

申年ハ山は築山ニ而も出不申、やたへ計四町運ふ

八太郎

角 治平

（天保八年・一八三七）

酉年ハ凶作之事故、孰も山・やたへ出ニ不申事

（天保九年・一八三八）

戌年ハ難作ノ為、巡見も無御座事

（天保十年・一八三九）

亥年ハ三町には、山築山ニいたし候得共、当町ニハやたい計出シ申候事

川 半兵衛

吉甚あらや 藤三郎

伊蔵

伊蔵

彼是之沙汰ニ相成、忒家にて可然宿ニ御座候得共、右等之訳故、

三軒ニ可仕候事、

(天保十一年・一八四〇)

子年 山三町共築山町内際曳く、やたい四町運ふ、中入之義ハ裏ニ記ス

前田や重兵衛

高瀬や与助

三谷や治助

伊蔵

但し番繰之義ハ前重と高与か当りニ御座候得共、当年は餅米不高直ニ付、
老升ニ付百三十文ニ御座候而三軒も可然哉と相定候事、また下直之年ハ
各別之義ニ御座候

(天保十二年・一八四一)

丑年ハ曳山・やたい共四町なから曳可申候事、仍而中入之人々ハ左ニ記
ス、

助右衛門

六之助

伊兵衛

今助

定助

伊蔵

(天保十三年・一八四二)

寅年ハ曳山・やたい四丁なから曳可申候事、仍而中入之人々ハ左ニ記ス

清六

豊蔵

甚蔵

伊蔵

(天保十四年・一八四三)

卯年ハ山・屋躰、出不申事

附り

(弘化元年・一八四四)

辰年ハ右同断

附り

(弘化二年・一八四五)

巳年ハ山・屋躰等出不申事

附り

(弘化三年・一八四六)

午年ハ右同断之事

(弘化四年・一八四七)

未年ハ山・屋躰共四町とも出申候事

吉江屋弥三兵衛

□屋之長左衛門

安清屋六次郎

城端之源次郎

但し雨ニ而宮之前より四町共引□かれ申事

嘉永元年(一八四八)

申年ハ山・屋躰共四町ながら出申事
附り、雨天ニ御座候得共四町とも曳廻り申候、

広与三市

飴三郎右衛門

院次郎八

嘉永貳年（一八四九）

一、酉年ハ山・家躰四町乍出申候事

附り、雨天ニ而御座候而御祭礼四日ニ相成、右之通り出申候事、就夫中
入人足二拾人者人足出申内へ上ル相談ニ相成、それも宜敷不から申候故、
百文宛出ス、一所ニ而まかなへ申候事、

一、家躰中連中并□□方等、中入之分は十軒ニ相定、左ニ記

飴屋三郎右衛門

紺屋七郎兵衛

川伊左衛門

吉江屋甚蔵

同屋 藤三郎

安清屋六次郎

上野屋清六

川崎屋文蔵

広安屋与三市

院林屋次郎八

十軒

右、番繰之義は先帳相調理、三郎右衛門より番繰之事

嘉永二年

一、酉年中入 川伊左衛門

但ス指支ニ付、上清六殿ニ而仕候事、

同三年（一八五〇）

一、戌年中入 紺七郎兵衛

（嘉永四年・一八五一）

一、亥年 当年ハ山・屋躰出不申事

（嘉永五年・一八五二）

一、子年 上清六

但し川伊左衛門方ニ而仕候、

山・屋躰四町ながら出申候、依而中入左ニ記

（嘉永六年・一八五三）

一、丑年 吉藤三郎

右同断

（安政元年・一八五四。ペーリー艦隊再来）

一、寅年 当年ハ唐国舟ニ而四町共出不申事

（安政二年・一八五五）

一、卯年 吉甚蔵

当年ハ山・家躰四丁ながら出申候事、しかし雨天ニ而泊り山ニ相成、

四日ニ曳不仕候事、

四日ニ吉甚方ニ而又候中入頼入申候事

安政三年（一八五六）

一、辰年 川豊蔵

当年ハ山・家躰出申候而中入事

右人足仲人 次兵衛

源之丞

与三七

安政四年（一八五七）

一、巳年 あめや三郎右衛門

右屋躰中連中仲入事

一、同年仲人

西？吉三郎

□長左衛門

専喜右衛門

安政五年（一八五八）

一、午年

山・屋躰出不申事

安政六年（一八五九）

一、未年 広与三市

屋躰仲人

当年ハ山・屋躰出申候、しかし雨天ニ而吉江屋前ニ横丁山罷出在候、其

上洩わかれ

一、同年 宮八太郎

山人足仲人之事 石嘉助

萬延元年（一八六〇）

一、申年 山・屋躰不申候事

文久元年（一八六一）

一、酉年 山・屋躰三町は相廻候らへ共、下町は参り不申候事、
仲人は中連中より人足仕候事、

同二年（一八六二）

一、 狐定助

同三年（一八六三）

一、 安六次郎

元治元年（一八六四）

一、 あめや三郎右衛門

元治二丑（慶応元年・一八六五）

一、 上清六

右、家・躰人足 宿伊兵衛

（慶応二年・一八六六）

寅年より午年（明治三年・一八七〇）迄、五年出不申候事、

明治四年末（一八七一）五月

一、屋躰中入 川伊左衛門

右家山付人足ハ

宿 川幸蔵

伊蔵

喜右衛門

川伊助

当年は山・屋躰四町共ニ出申候、横町山・屋躰上七殿之前ニ罷在、上町
之与は吉甚殿、川伊殿之前ニ罷在り、新町之与は角ニ罷在、下町は寺井
屋躰之前に罷在り、日は暮方ニ相成候、附、泊り山之相談の処、雨天ニ
相成、就夫（それにつき）引わかれと申事も御座候へ共、役人衆之詮義

ニは明日ニても晴上り候へは引廻れ等之事ニ御座候而、急ニは晴不申と思ひ下町ニは勝手次第第三町へ案内なしニ山と取こほし、跡三丁は其ままニ罷置、四日五日等降つつく、三日晚より五日晚迄人足付置入用も相懸り、雨は漸々六日昼喰う頃ニ晴上、就而は残り町引廻り約定之義、下町ニは取こほし居候故、是なり之引わかれと申、就夫、引合ニ相成、役人衆へ御達し申候へは四町共ニ残り町引廻れと之事ニ御座候、然共下町ニハ取こほし居候故、取組ニハ刻限相うつり又候日暮ニ相成と申、左候へは后後三丁つつ之引廻り下町へは行もせず受もせず之事之義ニセン義相成、下町ニは左様ニ被仰候へは、屋躰丈ケニ致呉との□ニよつて役人衆、夫ならば早速屋躰取組、残り三町先ニ相廻れと之事ニ御座候、夫より横町先山として上町之山・屋躰、新町之山・屋躰相並せ、新町七つやへ相廻り、下町は其跡より屋躰取組相廻申候事、

明治四年未五月

上町

山才許

(明治四年・一八七二)

未年

屋躰中入は川伊左衛門

同 川幸

山人足 八伊

□□

川伊助

明治五年(一八七二)

一、申年 中入

院林屋市之助

一、山人足 立勘

吉庄衛門
武右衛門
栄八郎

当年より横町山、下町ノ山、宮より上町新町へ廻り、夫より横町浦町へ引廻り候事、上町新町は今迄之通り宮より横町端ゆく事、下町御蔵町へ引廻候事、尤新町七ツや一年替りニして先ニ行事と跡ニ行事之定

明治六年(一八七三)

一、酉年 中入 吉江屋弥三兵衛

一、山人足 次平

又十郎

源之丞

清七

勘右衛門

明治七年 戌年(一八七四)

一、中入 紺屋半兵衛

一、山人足 沼田吉三郎

葉室長左衛門

広田与三七

得永長平

今年二日三日、大風ニ而四日ニ相成、山丈ケ町内引、屋躰計にて廻り

明治八年(一八七五)

亥年

一、中入 年代屋 彦兵衛

一、右人足 孫九郎

久助

明治九年（一八七六）

子年

一、中人 有川甚蔵

一、右人足 石原八太郎

榮久助

明治十年丑年（一八七七）

一、中人 田中文造

一、右人足 前川嘉助

新市兵衛

今年は家躰計ニ而、稽古は二十五日ヨリ喜左衛門殿より始め与三市のし

吉兵衛

明治十一年（一八七八）

一、中人 広田与三市

本年屋躰計、尤浦町横町御蔵町及び副戸長山田七彦殿方へ等ノ外巡り不

申、

屋躰人足中人

四人 飛驒佐助

式人 河合源蔵

式人 田井又三郎

外ニけいご老人同人

ノ 九人

今年、新町へ先巡り、稽古宿有川迄乍併宮八事、病中ニテ持置事

明治十四年（一八八一） 辰五月

一、中人 山田清六

一、人足三人 □山喜左衛門

三人 清瀬磯吉

十二人 田中伊平

三人 田中伊助

三人 北市甚作

ノ

今年、屋躰ハ四町巡り式町裏廻り横町ニ而大雨ニ相成候へ共、四町廻り

候共成、

但し山ハ御蔵町ニ而有川右衛門彼是申出し山とめにも相成候処、本家有

川殿引受ニ而七ツ屋へ夕方にもまわり候也、

五月 山屋躰跡酒宿

田原彦兵衛

明治十五年巳（午・一八八二）五月

一、中人 朝山吉四郎

一、右人足 三人 片山伊造

一人 有川留平

二人 永久保喜右衛門

二人 林甚太郎

今年ハ屋躰計ニ而四町廻り候者也、

但し七ツ屋ニ而横町ハ先き立ステ引替不都合ニ相成候ハハ、他の腰へ除

け候也、

跡酒宿

五月五日 朝山吉四郎

明治十六巳年（未・一八八三）

一、中入 安永六次郎

十七人

一、右人足 三人 □□源三郎

式人 杉原甚右衛門

式人 三谷源二郎

式人 飛驒和平

ノ

今年ハ五月一日二日天氣宜敷候故、行灯ハ廻り、三日より大雨ニ相成、

五日ニ御祭、屋躰三町、新町ハ曳山仕候、都合四本ニ而四町廻り候也、

跡酒宿

五月五日 前川嘉助

(明治十七年から十九年は記載なし)

明治貳拾年之事(一八八七)

山・屋躰、町々の許儀ニ而横町山・屋躰出シ上町は屋躰出シ、新町は山

出シ浦町山出シ、町々へ引わかり也、

中入はなし

山裁許 明治十年より林甚太郎

同十六年より山田幸吉

同二十年より杉原与太郎

同三十年 北川芳太郎

跡酒宿

明治貳拾年 林市助

亥年

五月八日

明治二十壹年(一八八八)

子五月

一、中入 中村伊三郎

十七人

一、右人足 中川茂右衛門

八人

跡酒宿

五月八日 長谷川長市郎也

今年ハ屋躰計ニ而四町廻ル候者也、

但し新町は山ヲ出シ、残三丁屋躰ヲ出シ都合四本ニ而四町廻ル、然共今

年より新町山先きニ立、上町ニ番目也、横町三番目也、下町四番目也、

但し新町山は七ツ屋半兵衛ノ前控候処、勝手ニ西方寺前迄先立候ニ付、

半兵衛前迄引もとシ候事、

右、ケイコ宿名記

有川昌平 山田清六

広□三之丞 石原八太郎

長谷川喜一郎 吉田七治郎

朝山吉四郎 林甚太郎

四月二十二日より同三十日迄

明治二十二年(一八八九)山出

中入 前川嘉助殿

山人足 中入

広島三之助殿

五人

石原八太郎殿

五人

在川口太郎殿

四人

②嘉永五年「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」
(抜粋)

南砺市立福野図書館所蔵

福野敬神会旧蔵、南砺市立福野図書館所蔵「天保六年以降 御中人並御通夜リ喰番繰帳」という表紙で綴じあわされた帳簿のうち、嘉永五年(二八五二)「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」の初めから嘉永七年(安政元・一八五四)までの部分を掲出する。

ここでいう中入・夜喰とは、神輿巡幸の際の中入御宿・夜食の担当者のこと。『福野町史』古文書編(六一〇頁)の四四四号文書もそれに関する記録。両役職については、『町史』に以下のような説明がある。

中入御宿とは神輿巡幸の休憩所提供役で、そこで祭式があり供奉者への接待もあった。夜食は、五月二日の夜、御旅所に神輿を安置してから、山伏(神主)に夜食を提供する役。いずれも町の分限者(富裕者)が交代で奉仕した。文化八年(一八一二)までは、二軒で勤め中入御宿を勤めていたが、同九年以降は一軒に改められ、半四郎・清左衛門・伊左衛門・吉左衛門・六兵衛の五人で担当した。天保期になってから他八郎・清六・万右衛門・与太郎・七之丞ら新興の人が加わり、明治十四年(一八八一)からは十八人衆と呼ばれた分限者上位十八人が順番で中入御宿を勤めた(『町史』古文書編(六一〇頁))。

「一、御蔵町・・・」の部分までは、嘉永五年時点で整えた役員一覧で、この時点での役員構成がわかる。「会所詰」「十人頭」が四・五年分記されているのは、先々の「毎年順番」の担当予定者とみられる。「一、

嘉永五月五年」以降は、毎年、中入、夜食の担当者を書き込んでいった実績記録で昭和四年(一九二九)まで書き継がれている。

(表紙)

壬嘉永五年

神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳

子四月改 福野町役人

(本文)

一、毎年五月三日、役人之内三人、十人頭、町内より壱人宛、御官方御会所へ朝六ツ時ヨリ相詰候而曳山等之穿鑿仕候事、

会所詰毎年順番

一、嘉永五年壬子 伊左衛門

源衛門

万右衛門

一、癸丑 七兵衛

磯次郎

四助

一、甲寅 文蔵

清六

七郎兵衛

一、乙卯 善吉

忠右衛門

与太郎

一、丙辰 他八郎

甚蔵

徳兵衛

十人頭 同断

一、壬子 甚助

半九郎

一、癸丑 覚右衛門

一、甲寅 勘左衛門

一、乙卯 吉四郎

山才許人記

一、上町 茂兵衛

嘉助

幸吉

喜右衛門

一、新町 茂兵衛

左兵衛

与吉

和右衛門

一、下町 伊七郎

安兵衛

十右衛門

一、横町 徳次郎

宗助

新兵衛

伝助

一、御蔵町御神燈之才許人 甚兵衛

彦次郎

(これ以降は昭和四年・一九二九まで書き継ぐ)

一、嘉永五年(一八五二) 五月

御中入 算用聞見習伊左衛門

一、同断 夜喰 飴屋徳次郎

一、同年、会所詰 算用聞見習伊左衛門

肝煎源衛門

組合頭万右衛門

十人頭甚助

同

同並 半九郎

一、嘉永六年 御中入 上野屋清六

一、同年 夜喰 宮島屋八太郎

(安政元年・一八五四)

嘉永七年 御中入 組合頭万右衛門

同 夜喰 合羽屋宗助(花押)

但、同年、万右衛門殿指支申二付、源衛門方ニ而御中入有之事、夜喰之

義も宗助方ニ指支申二付、与三市方ニ而夜喰相勤申候、

(安政二年・一八五五以降は省略。写真は全文を掲載)

③ 絵葉書「越中福野夜高祭絵葉書」

封筒、二つ折り解説紙、絵葉書(縦一四二ミリ、横九一ミリ)六枚。

個人蔵

個人蔵

うち一点は写っている提灯の文字により七津屋の行燈だとわかる。発行元の「UTSUNOMIYA」は金沢の老舗書店「うつのみや書店」とみられる。撮影担当の「ミヅキ写真館」は、かつて福野の新町に所在した（往藏久雄氏ご教示）。制作時期は、捺された高岡駅の記念スタンプの日付「昭和九年（一九三四）五月十九日」から、それ以前と判明する。二次利用自由。

〔絵葉書記入文字〕

ミヅキ写真館撮影

UTSUNOMIYA（宇都宮書店）

UNION POSTALE UNIVERSELLE（フランス語で

万国郵便連合）

〔封筒表書〕

越中福野 夜高祭絵葉書

〔記念スタンプ〕

高岡駅 昭和9・5・19

〔解説紙〕

越中福野町夜高行燈の解説

福野町。富山県東砺波郡にあり、砺波平野の中央に位置し、中越線、加越線の交叉点にして交通至便、人口五千余、木綿織を産す所謂福野縞之なり。

福野町は昭和六年より二百八十二年前、慶安二年に、野尻の郷士阿曾三右衛門が郡奉行に願出で翌年許可を得て創立したる市場町なり。爾来今日に至るまで毎月二と七の日に市行はる。

神明社の創立と五月大祭。福野町福野の氏神にして 天照皇大神 豊受皇大神を奉祀す。

福野町の創立後慶安五年に伊勢神宮より勸請せるものと伝ふ。その御霊代御着の日、俱利伽羅辺にて日暮れたるにより、町民は拵つて提灯代りの行燈を携へて奉迎せり。此の由来に基づき毎年五月大祭にあたり、一日の宵祭及び翌二日「例祭執行の後、神輿を御旅所に奉安」の御旅所祭の両夜、行燈を持参し参詣したるもの、次第に習慣となり、更にその行燈に意匠を加へ競うて大いなるものを製し遂に地方特有の神事となれり。五月三日には神輿の渡御あり、この日各町の山車並に屋台を曳出して全町を練廻る。蓋し神輿に随行するの謂なり。

夜高行燈。略して「夜高」といひ、或は「にはか」ともいふ。五月一日二日の両夜、全町にて約三十台の大紅燈に火を点じて美観壯観いふべからず。

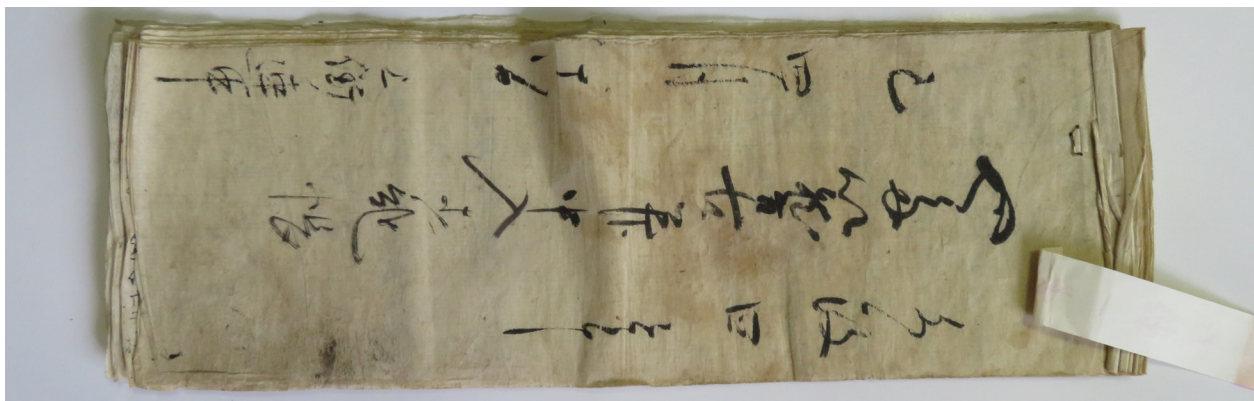
其の構造は中心に武者絵の勇壮なるを描ける「田楽」行燈（元は奉書十八枚張り位ありしも今は九枚乃至六枚張りとなる）あり、その上方後に「釣物」を吊るし、更に頂に「山車」を据う。

この釣物も山車も竹を以つて骨組を作り、紙を貼り、蠟にて線、模様を描き赤を主とせる彩色を施したるものにて、高御座、神輿、花鳥、人物、城郭、舟、車、等の形を表す。その技巧極めて精細、人目を驚かすものあり。而もこれ毎年その構造意匠を新案するものなれば以て其の努力を察すべきなり。更に町内の若衆が勇壮にして快活なる調子を以て夜高節といふべき一種の俚謡を太鼓、拍子木の囀にて唄ひつ、昇き廻り練り行く光景は実に壯絶快絶と称すべし。

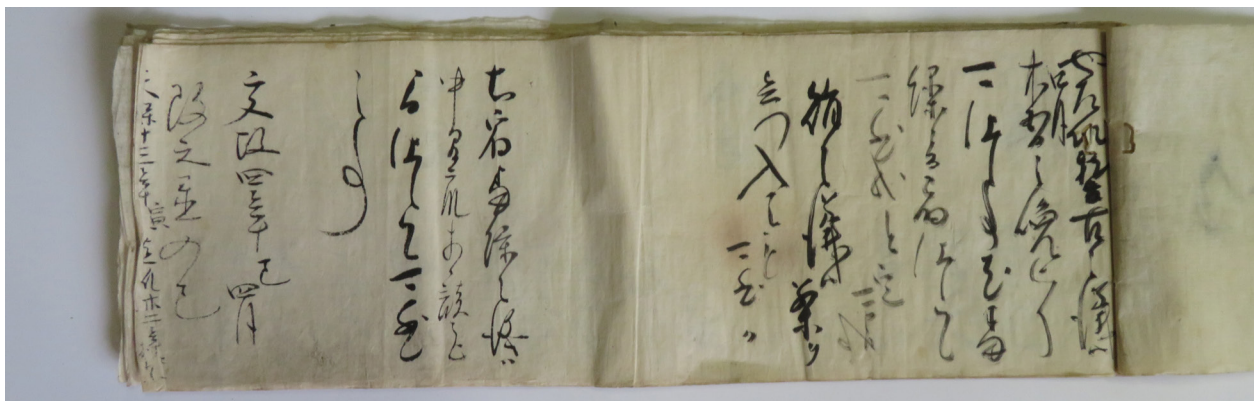
これを観んとして近郷近在はもとより遠く汽車便を以て来る客頗る多く、中越線加越線共に臨時列車を運転し、町内の雑踏股賑を極む。（神明社々掌 河合正則識す）

夜高節

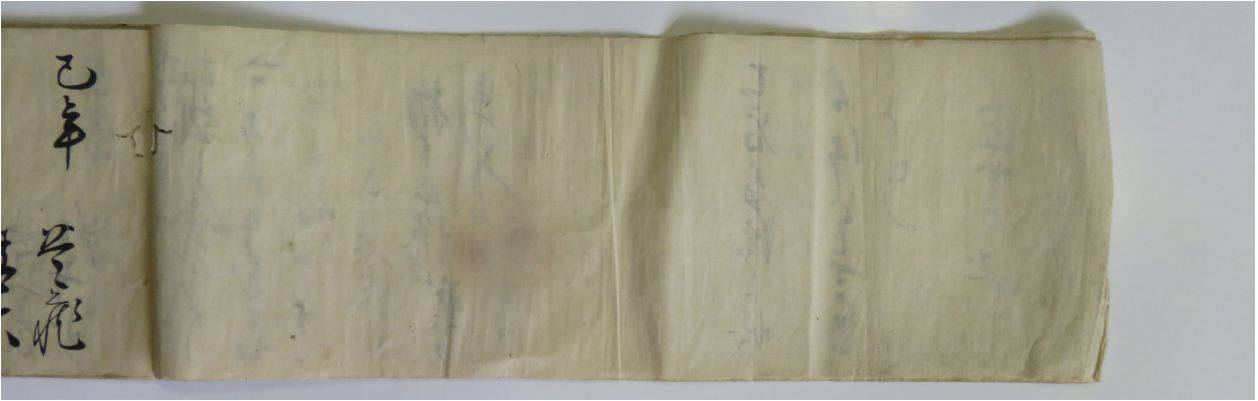
- 五條の橋から牛若弁慶ヨ蹴合ひ跳合ひ
サマ弁慶マツ負けた サ、ドツコイサノサ ヨイヤサ チヨイヤサ
- 瀬田カラハンの唐橋カラカネギボシ銅擬宝珠ヨ水に影さす
サ、膳所ゼの城 サ、ドツコイサノサ ヨイヤサ チヨイヤサ
- 今年や世が良うて穂に穂がさるヨ 榊がいらいで
サ、箕で量る サ、ドツコイサノサ ヨイヤサ チヨイヤサ
- 東山から西山までもヨ蜘蛛が糸かく
サ、山蜘蛛が サ、ドツコイサノサ ヨイヤサ チヨイヤサ



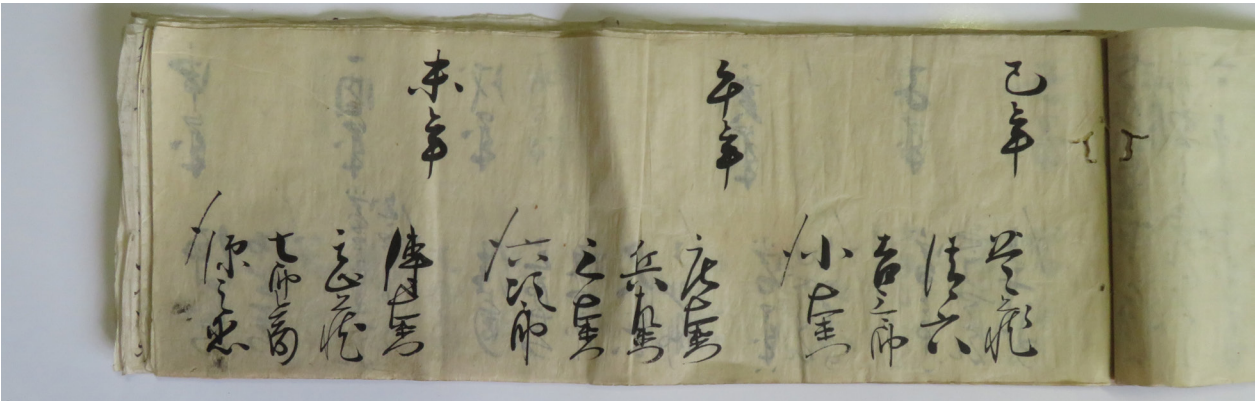
『やたい稽古并中入等記帳』1



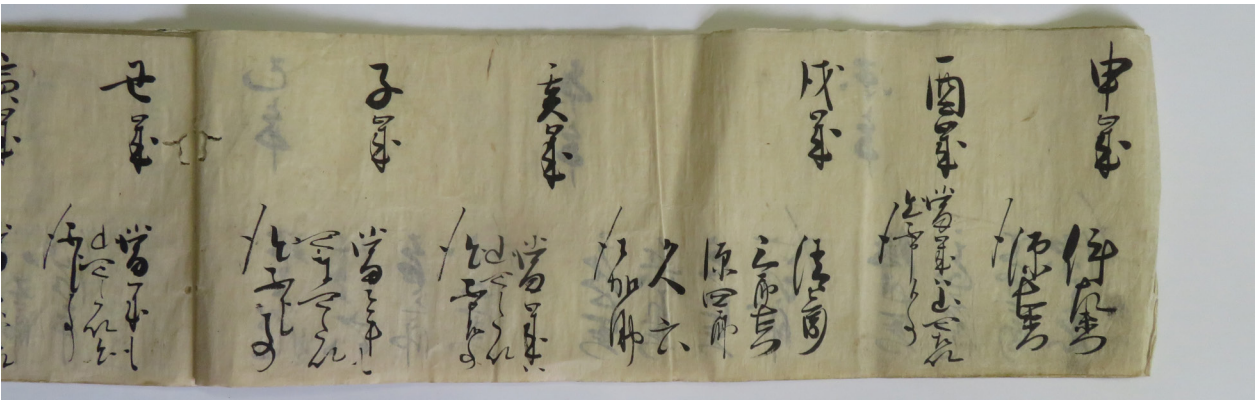
『やたい稽古并中入等記帳』2



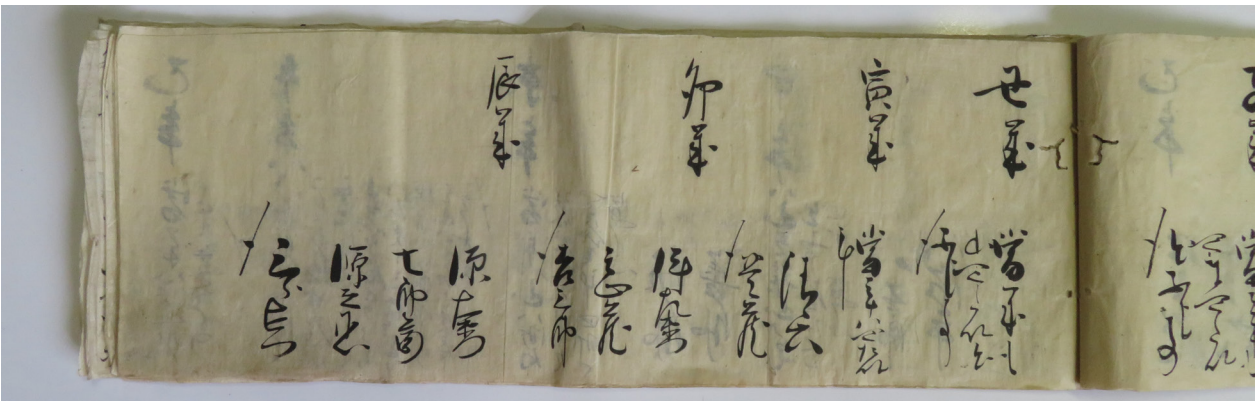
『やたい稽古并中入等記帳』 3



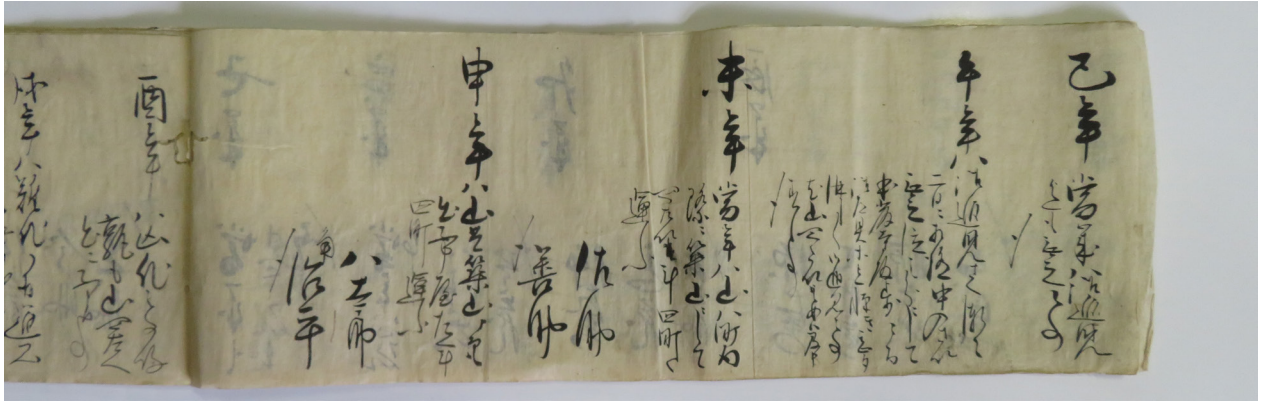
『やたい稽古并中入等記帳』 4



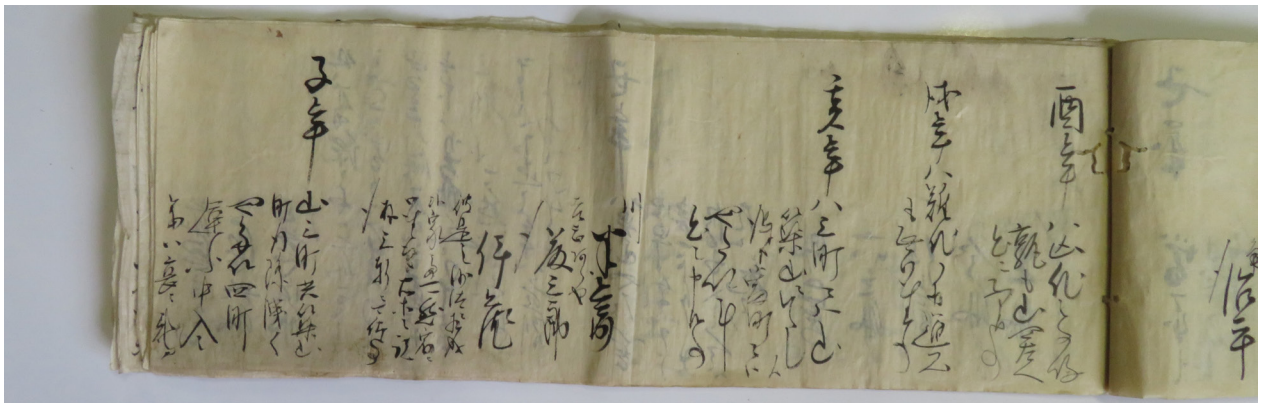
『やたい稽古并中入等記帳』 5



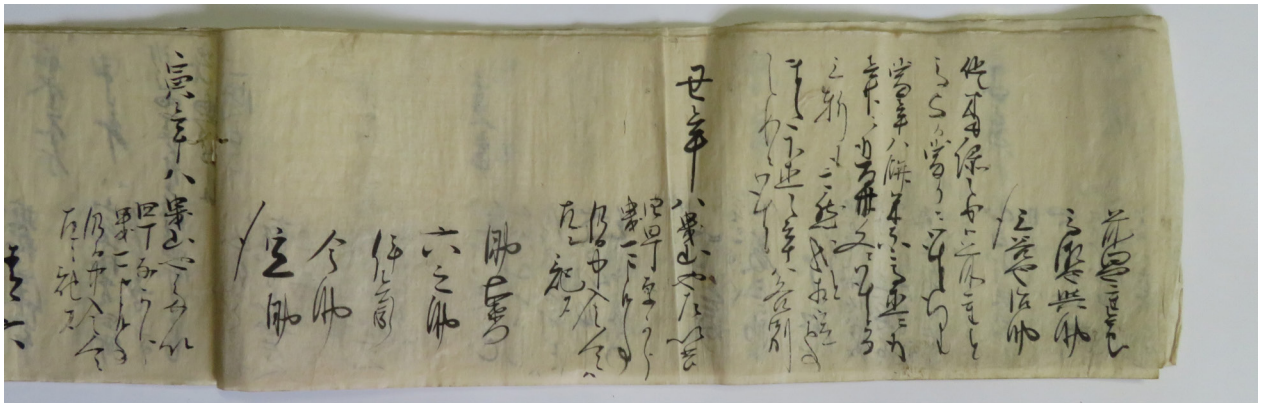
『やたい稽古并中入等記帳』 6



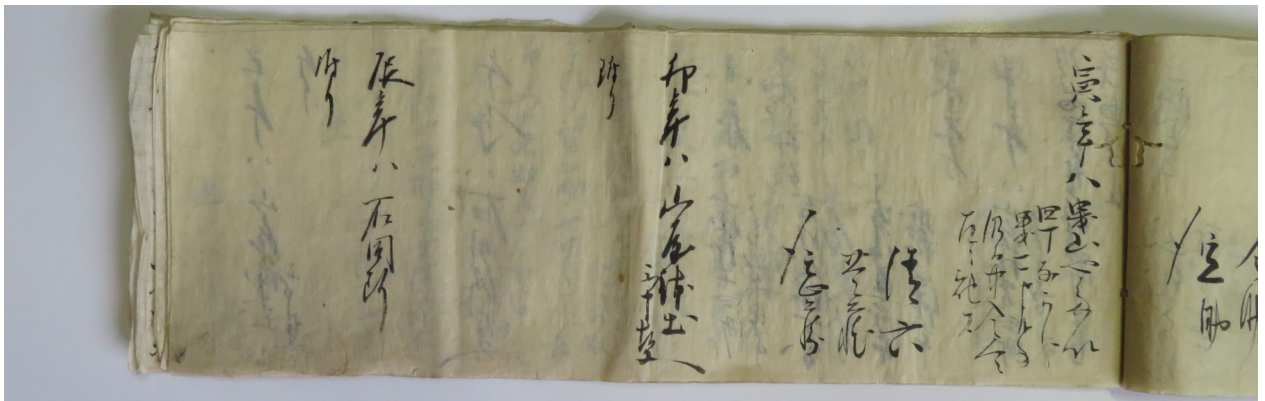
『やたい稽古并中入等記帳』 7



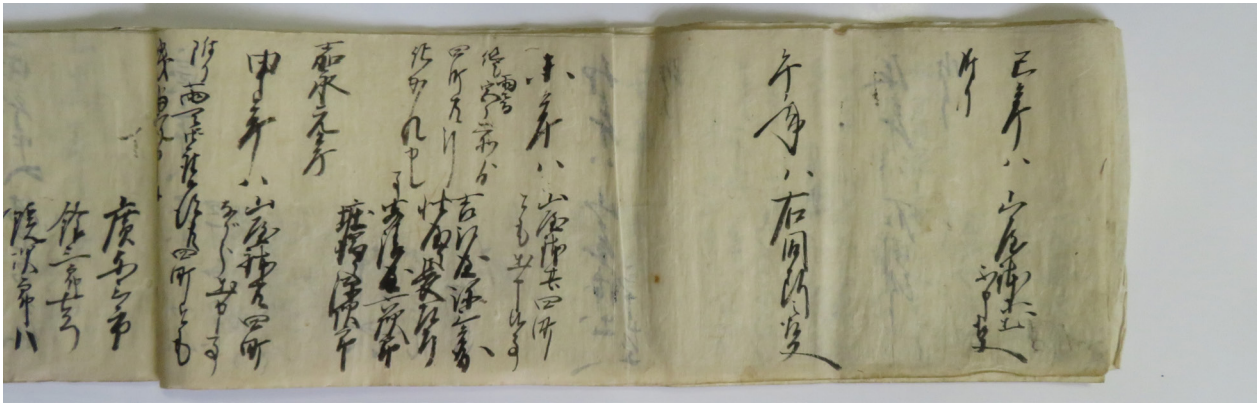
『やたい稽古并中入等記帳』 8



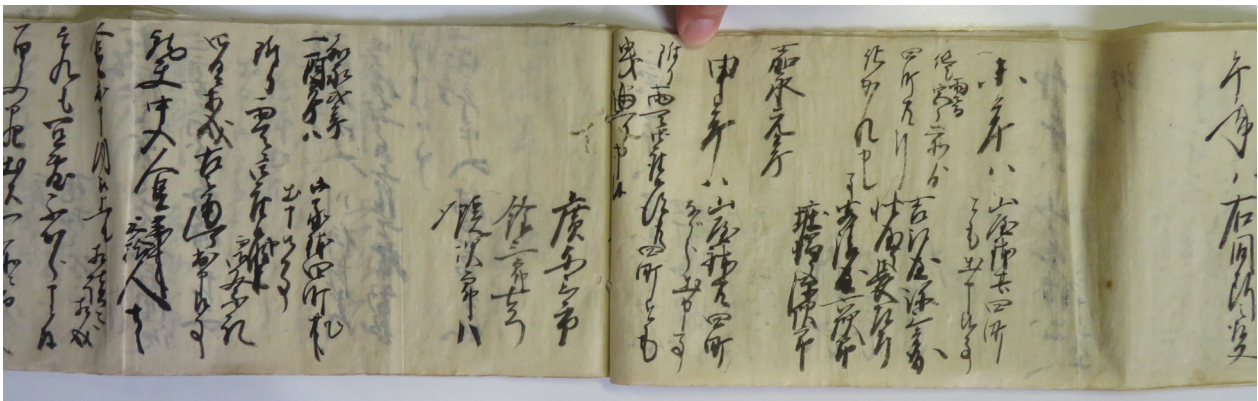
『やたい稽古并中入等記帳』 9



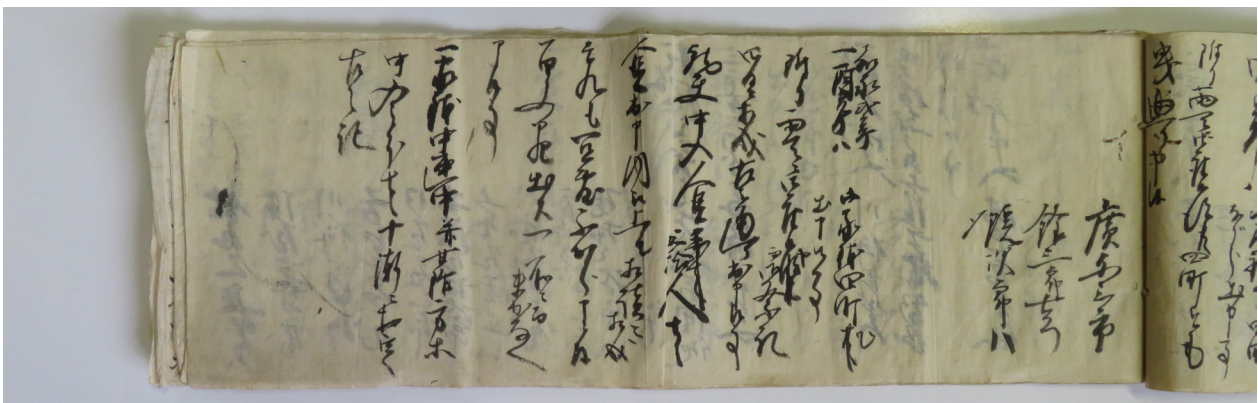
『やたい稽古并中入等記帳』 10



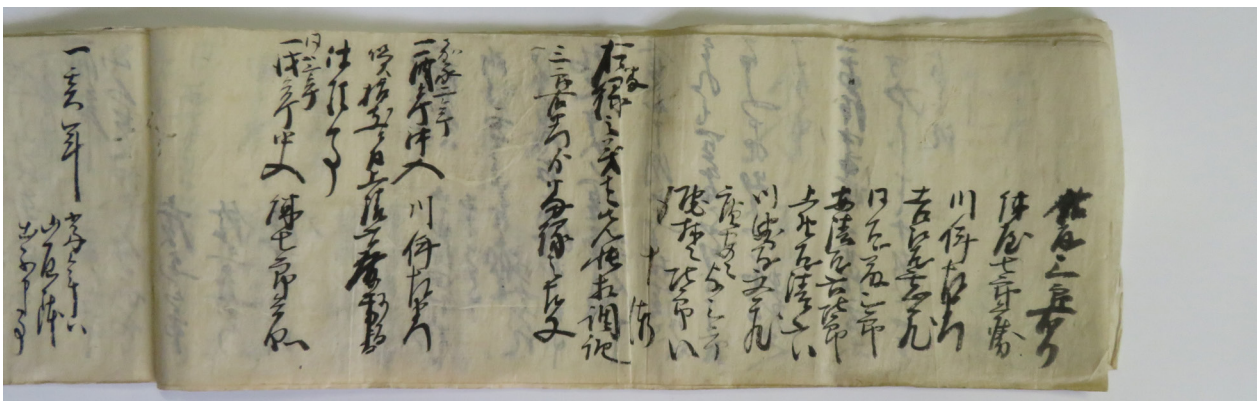
『やたい稽古并中入等記帳』 11



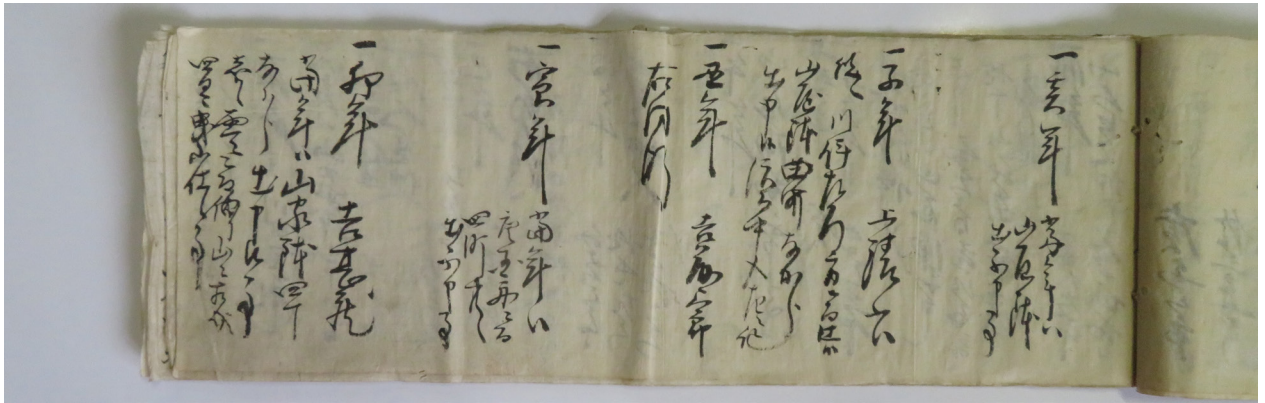
『やたい稽古并中入等記帳』 11-2



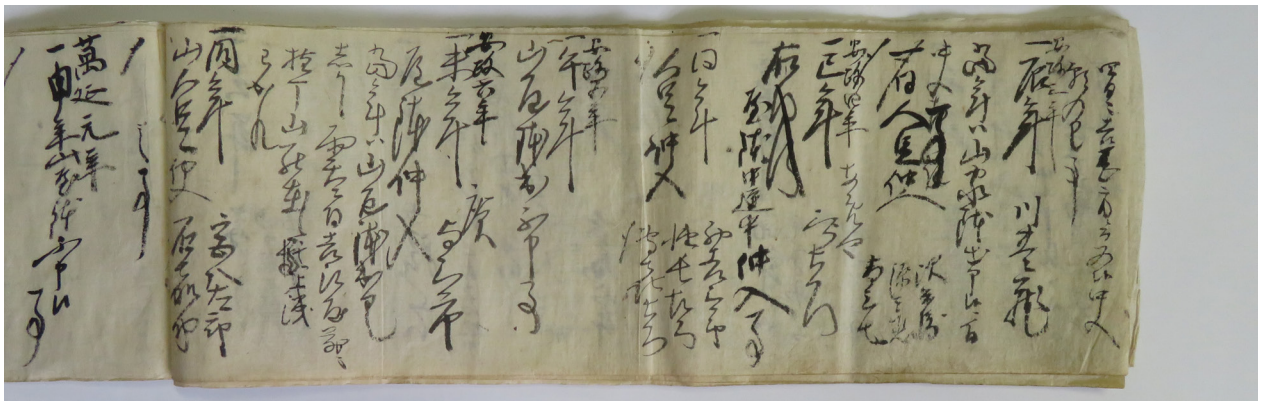
『やたい稽古并中入等記帳』 12



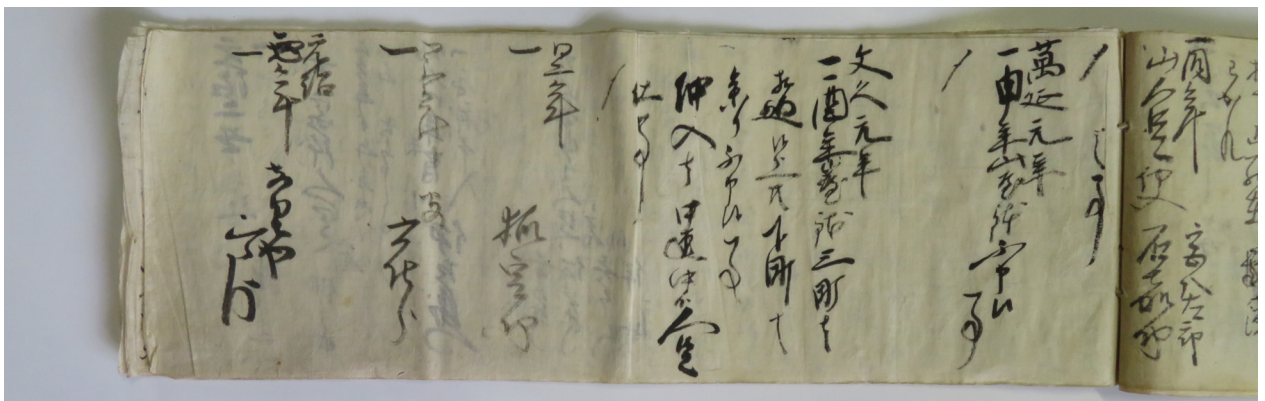
『やたい稽古并中入等記帳』 13



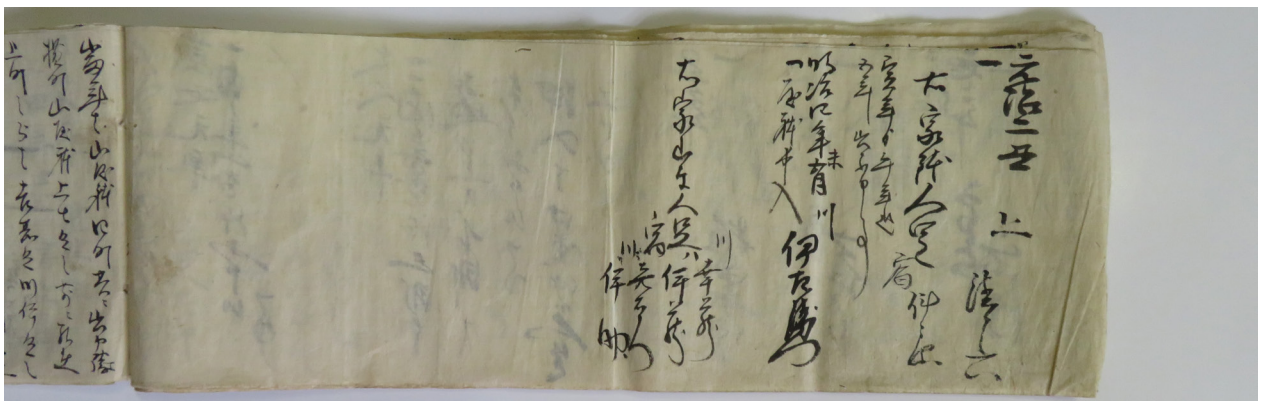
『やたい稽古并中入等記帳』 14



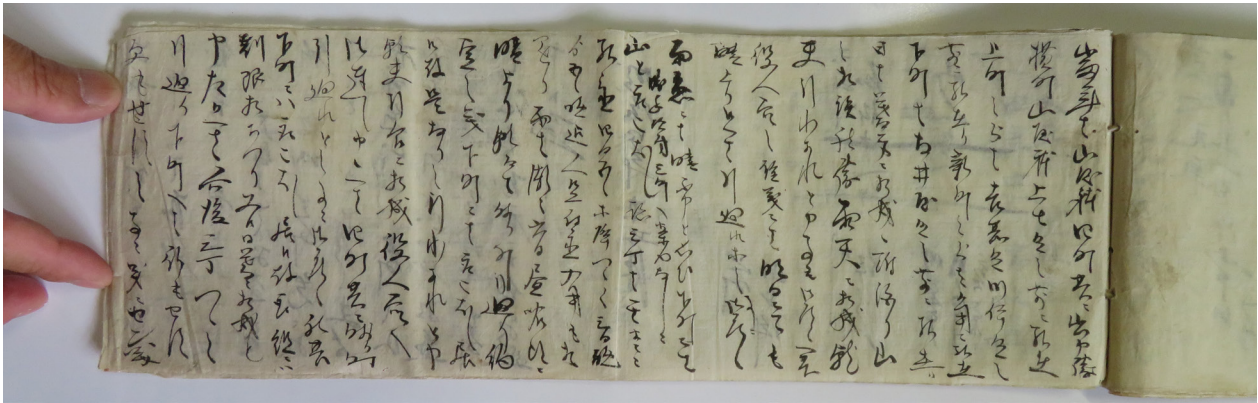
『やたい稽古并中入等記帳』 15



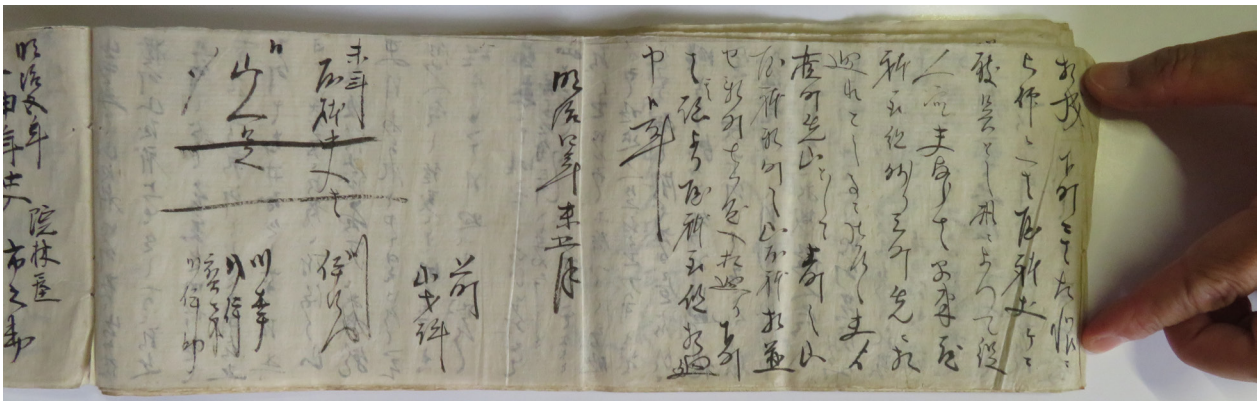
『やたい稽古并中入等記帳』 16



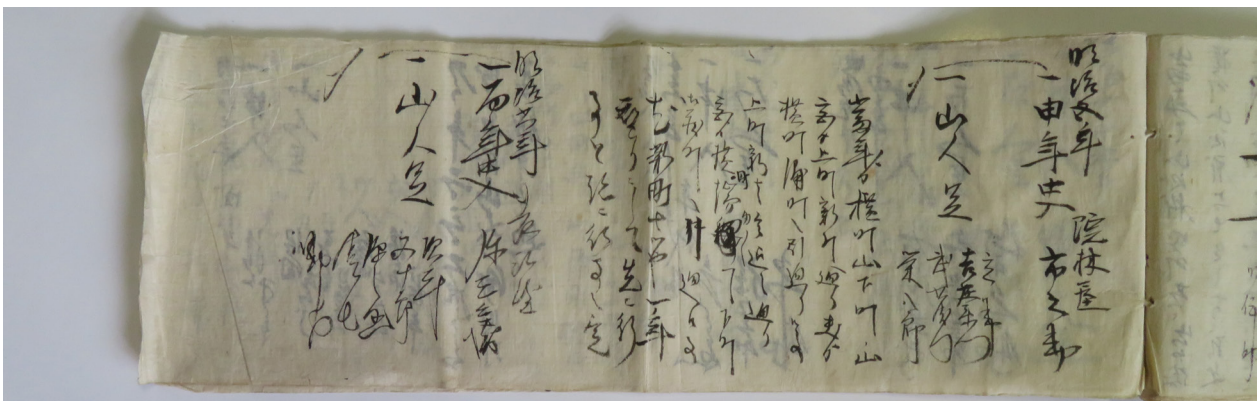
『やたい稽古并中入等記帳』 17



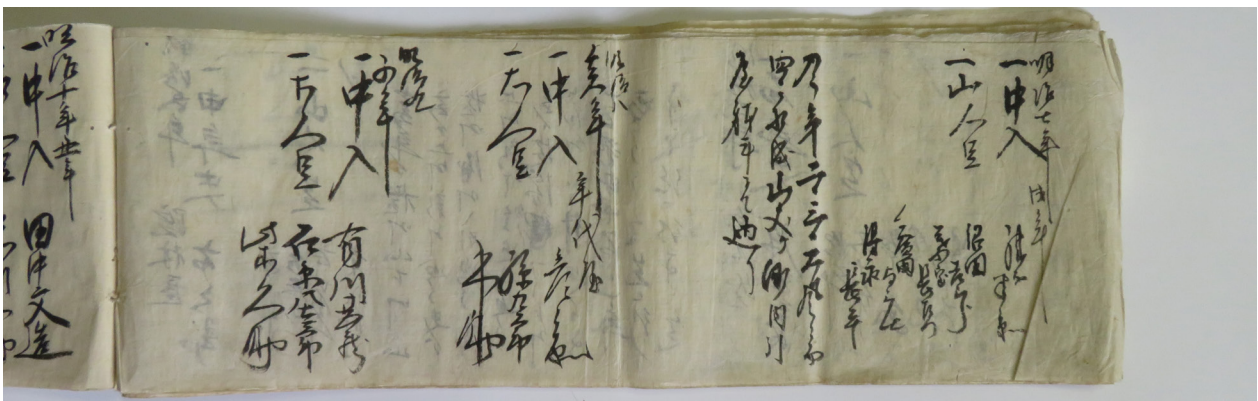
『やたい稽古井中入等記帳』 18



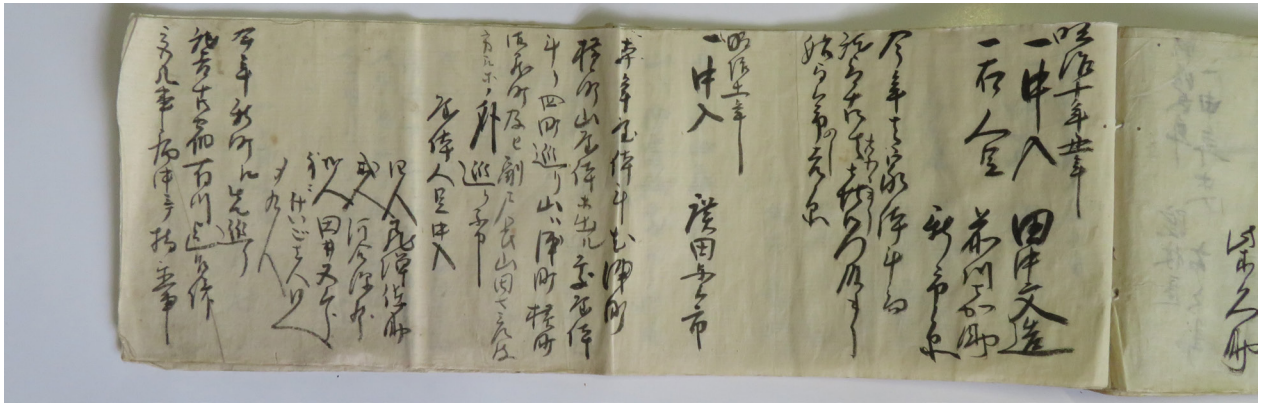
『やたい稽古井中入等記帳』 19



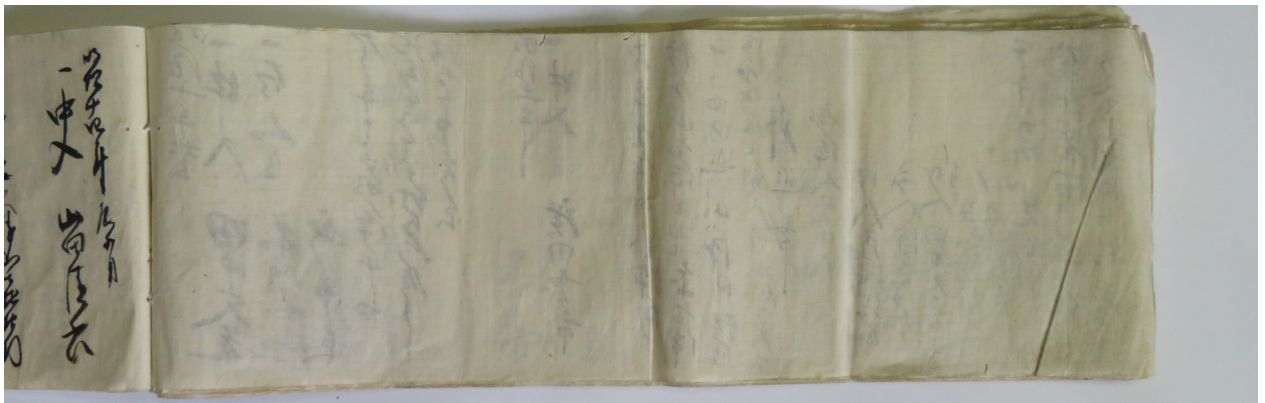
『やたい稽古井中入等記帳』 20



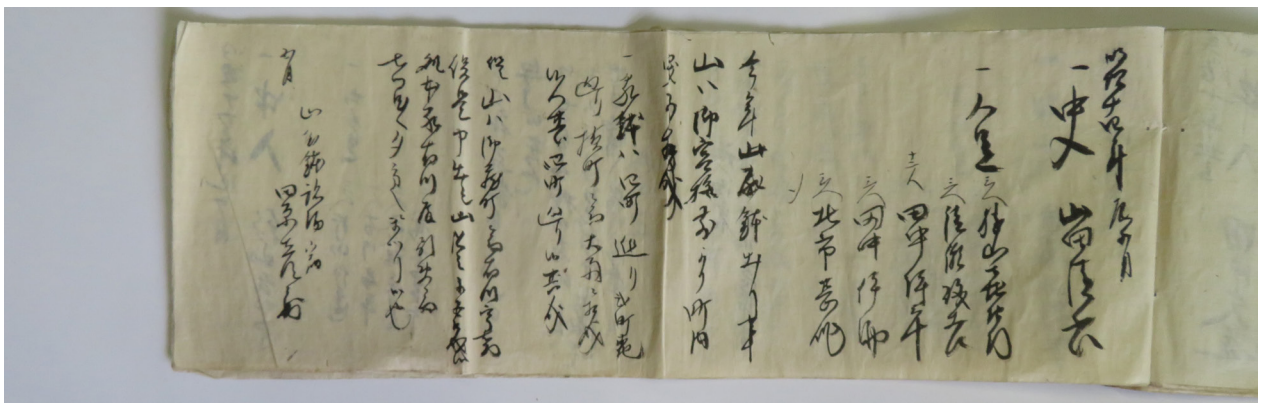
『やたい稽古井中入等記帳』 21



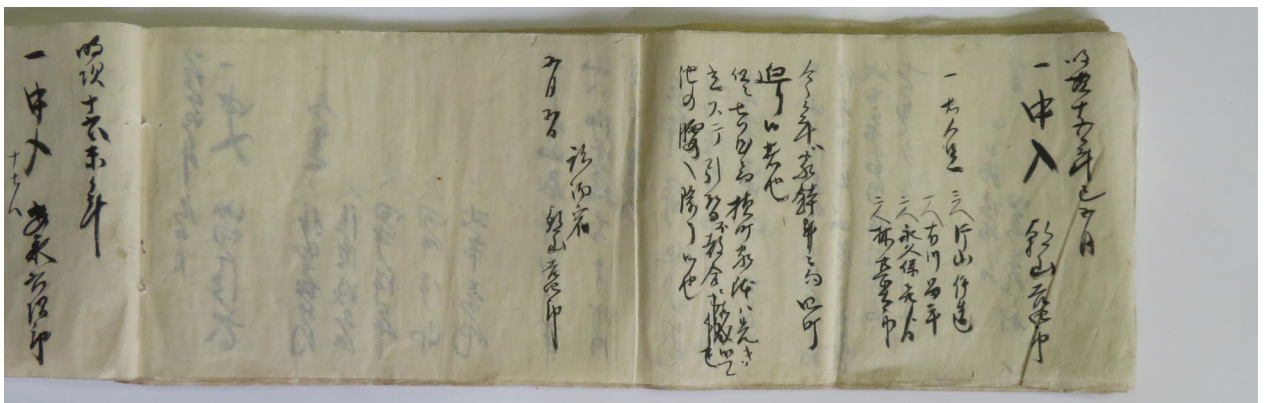
『やたい稽古井中入等記帳』 22



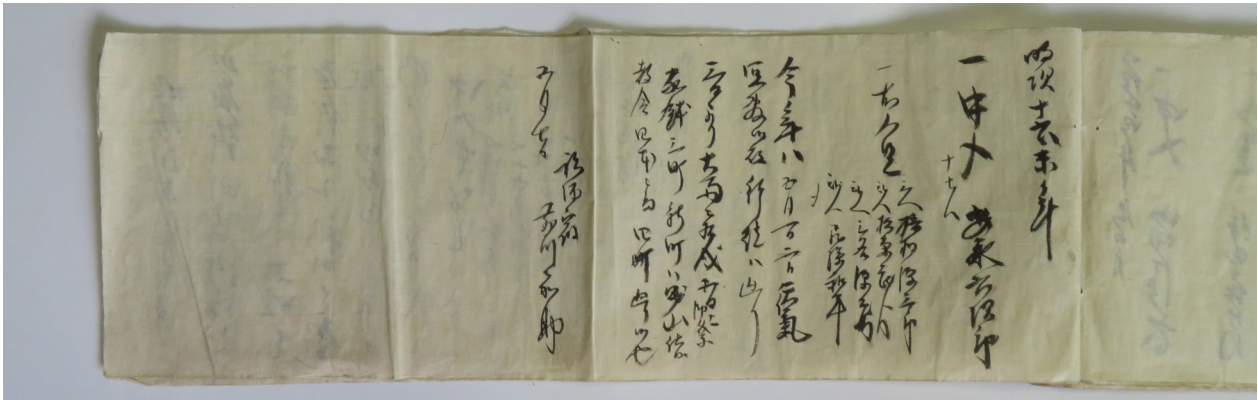
『やたい稽古井中入等記帳』 23



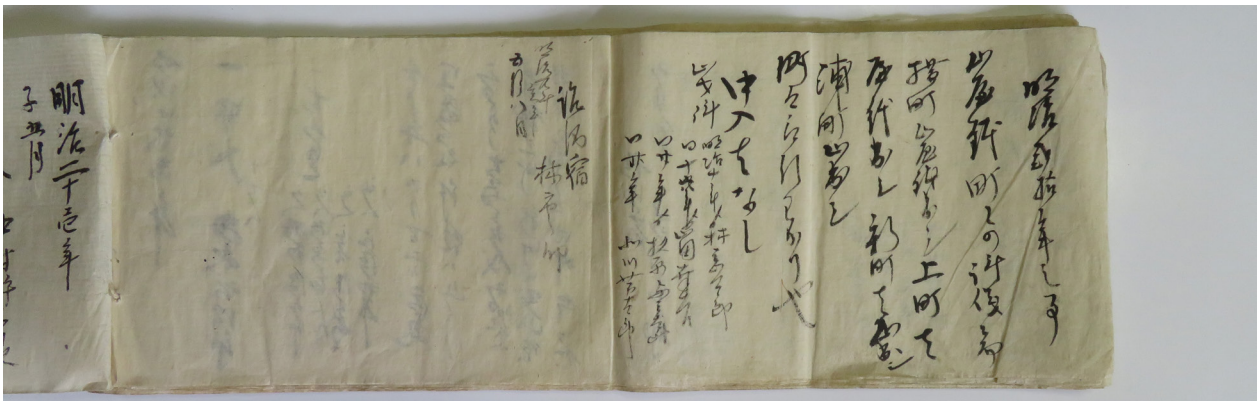
『やたい稽古井中入等記帳』 24



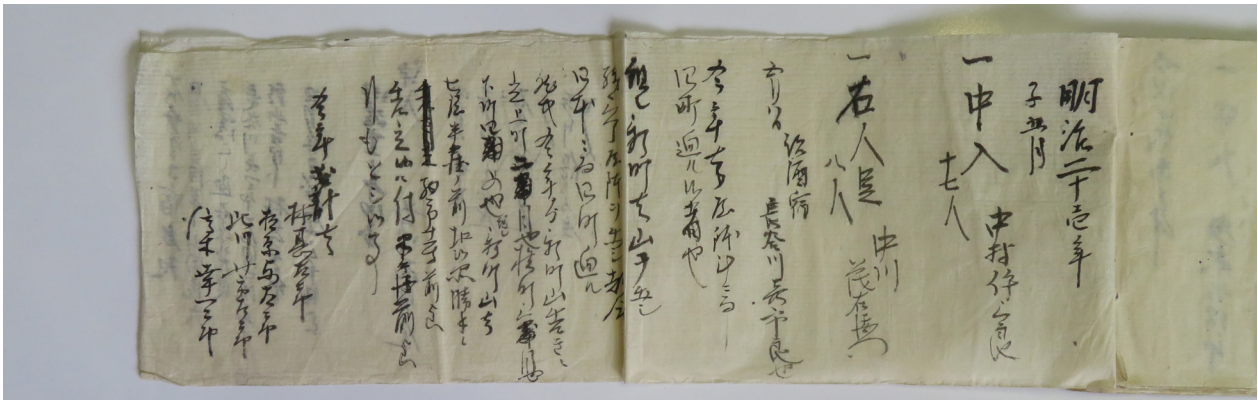
『やたい稽古井中入等記帳』 25



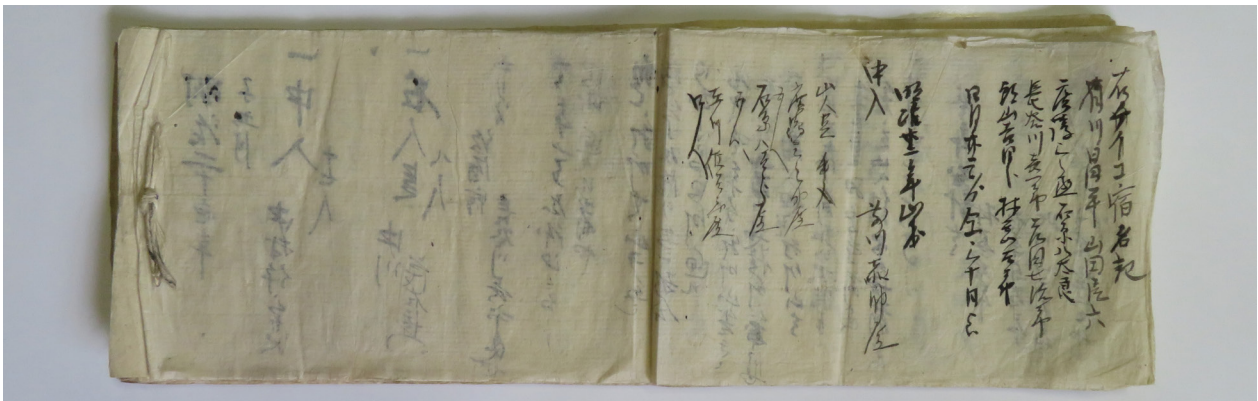
『やたい稽古并中入等記帳』 26



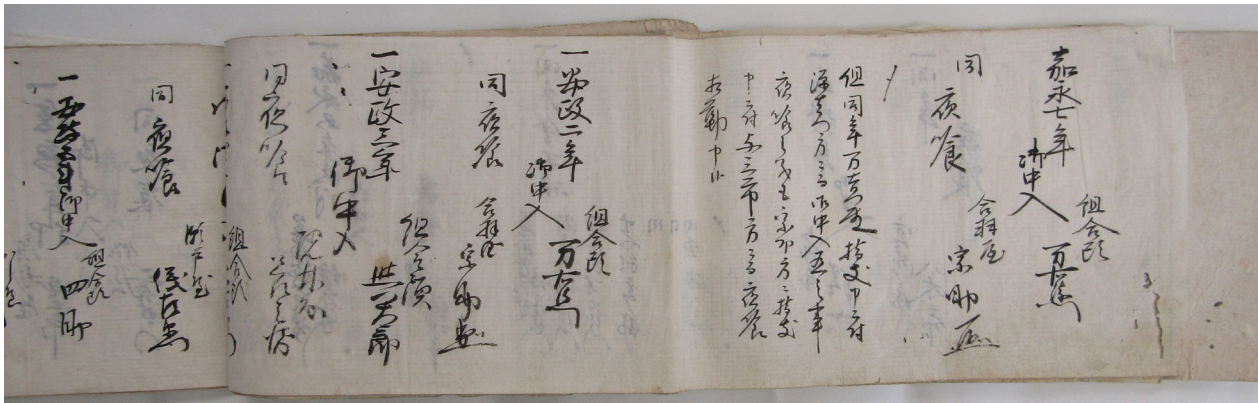
『やたい稽古并中入等記帳』 27



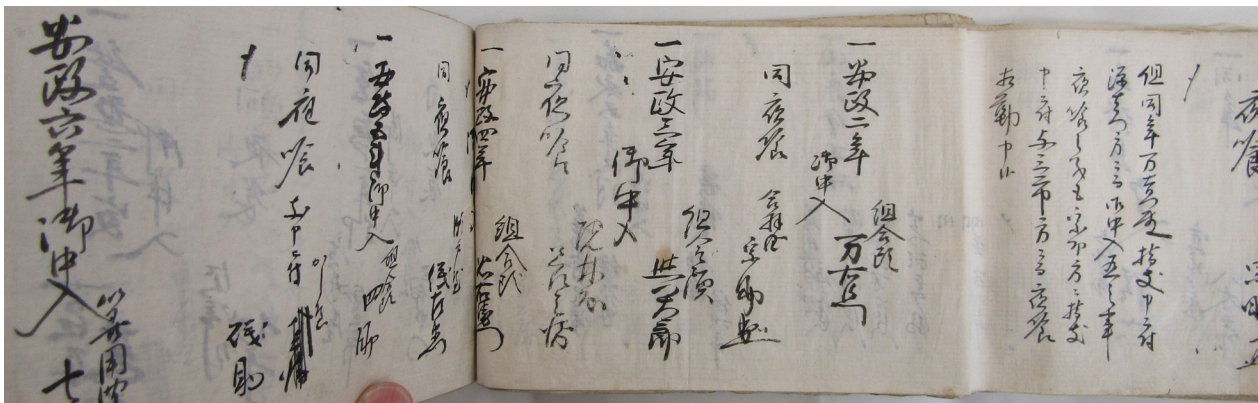
『やたい稽古并中入等記帳』 28



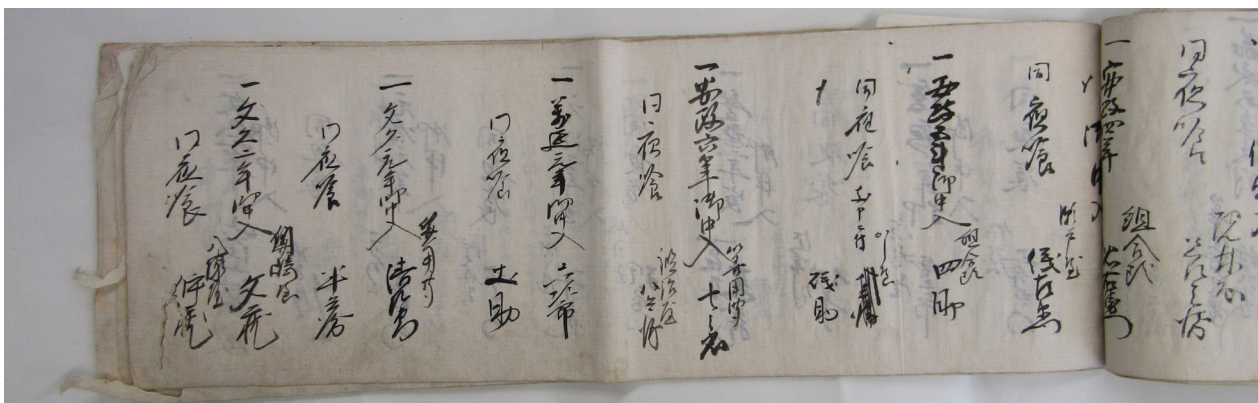
『やたい稽古并中入等記帳』 29



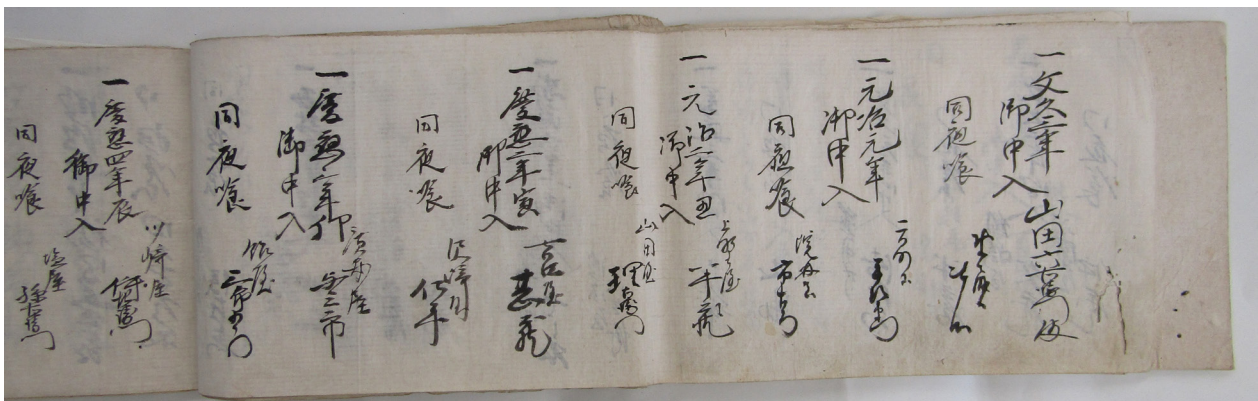
「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 5



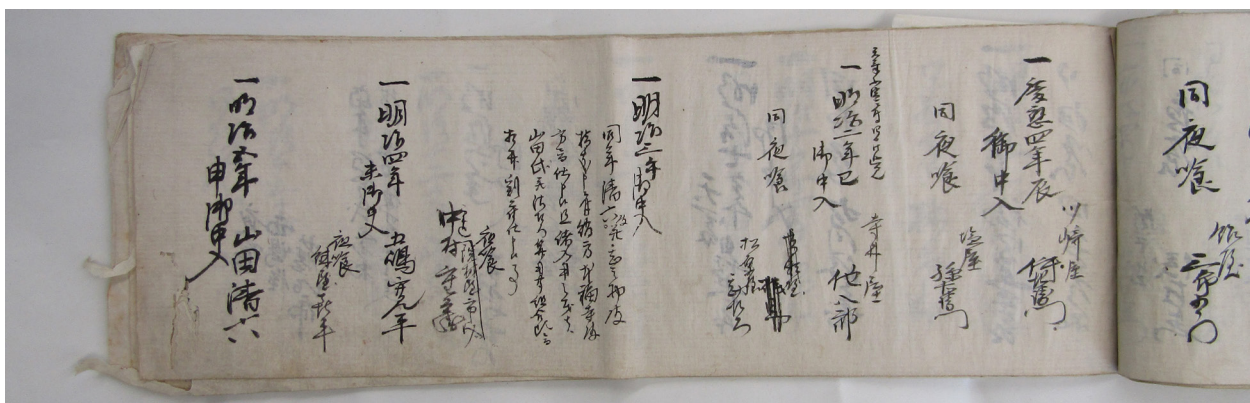
「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 5-2



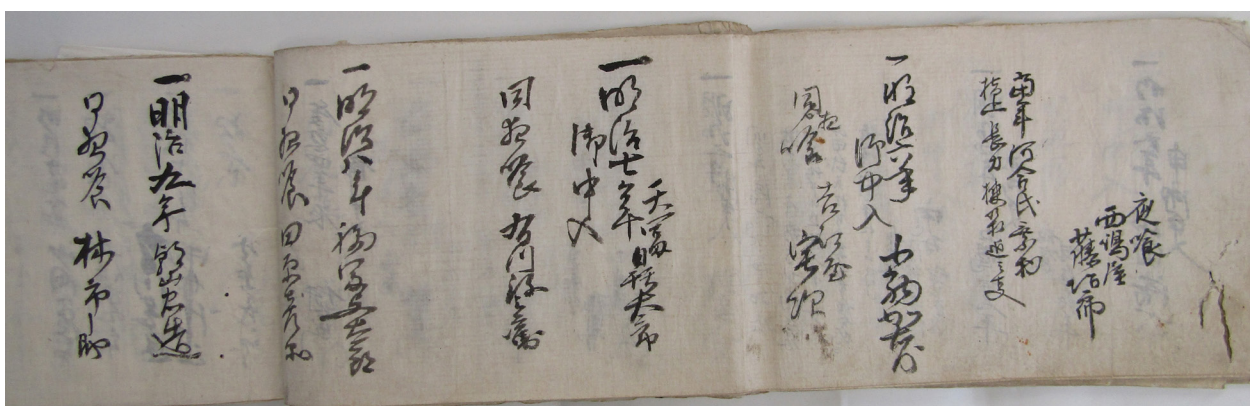
「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 6



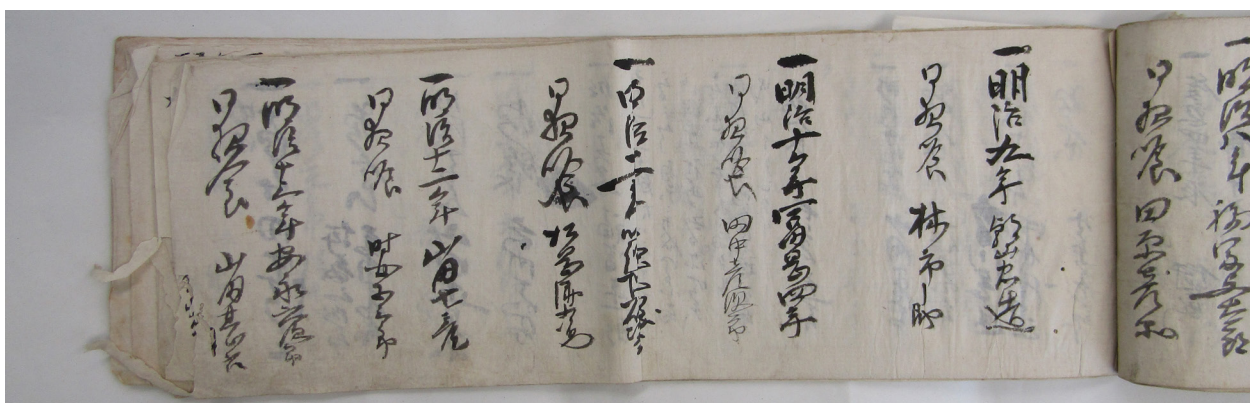
「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 7



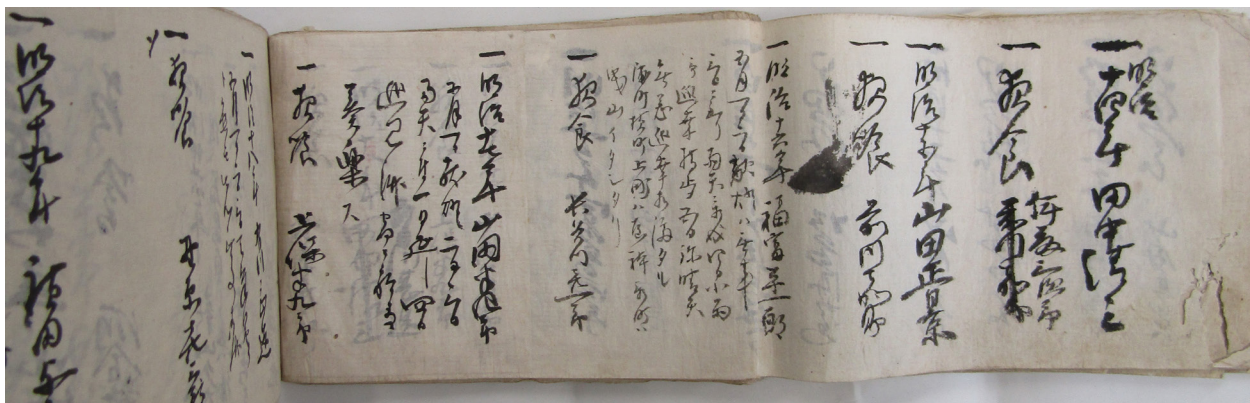
「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 8



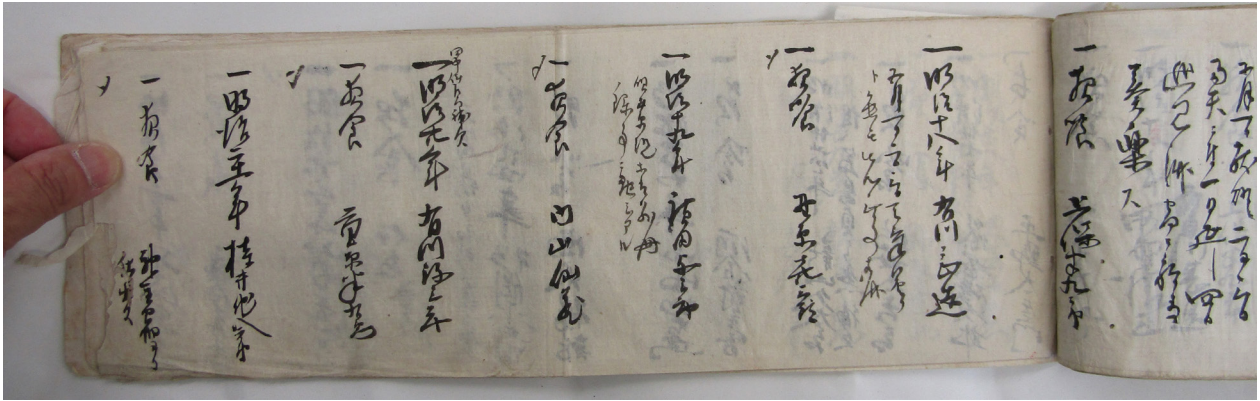
「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 9



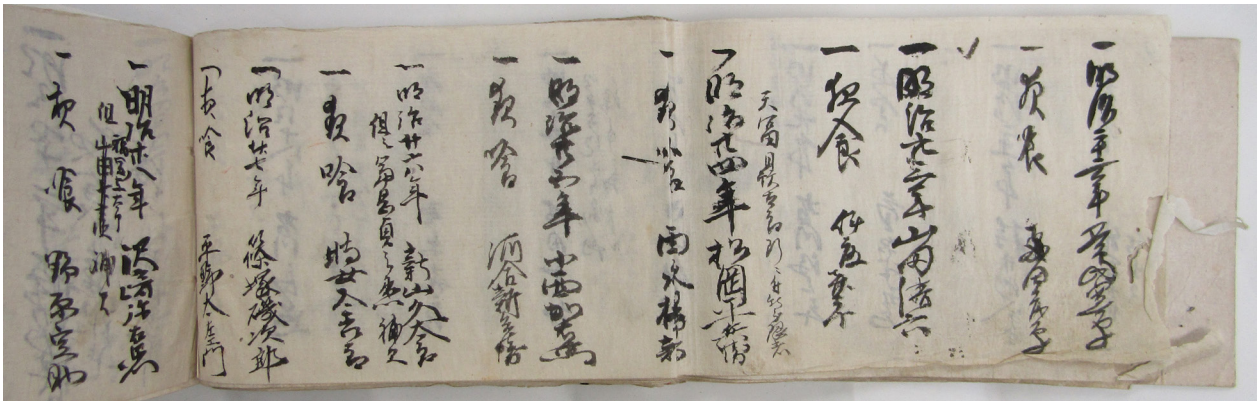
「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 10



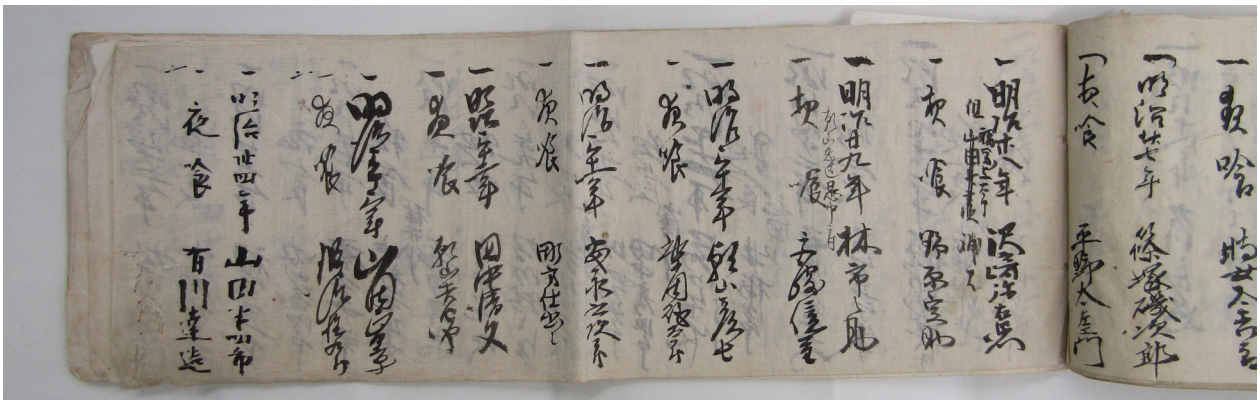
「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 11



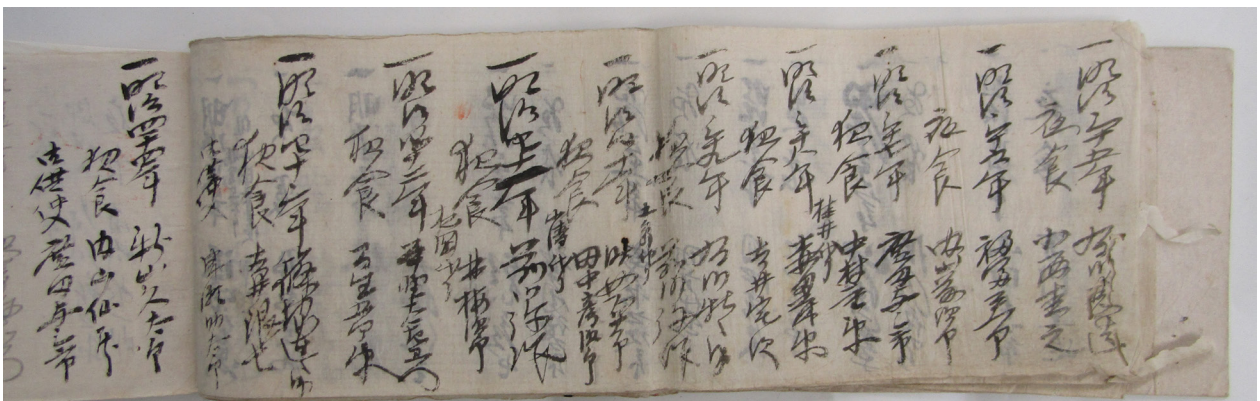
「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 12



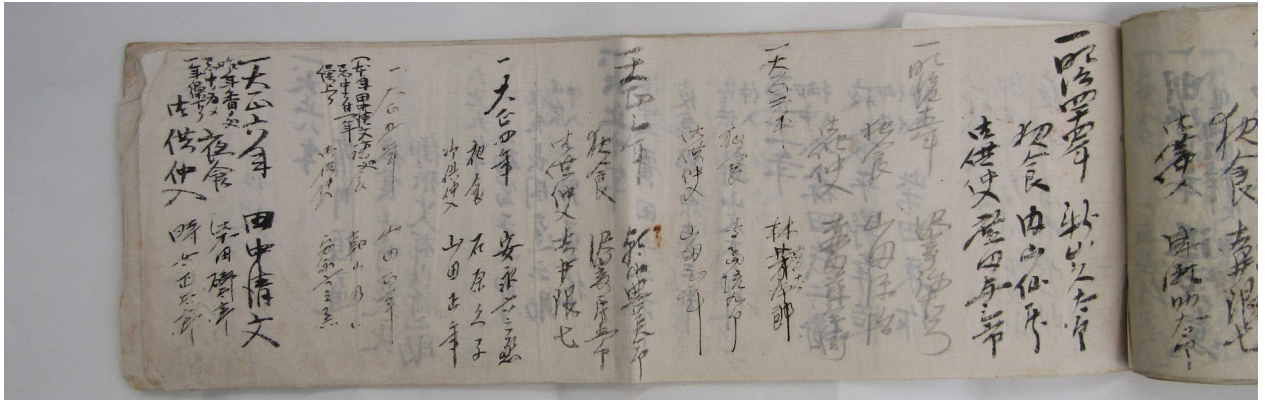
「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 13



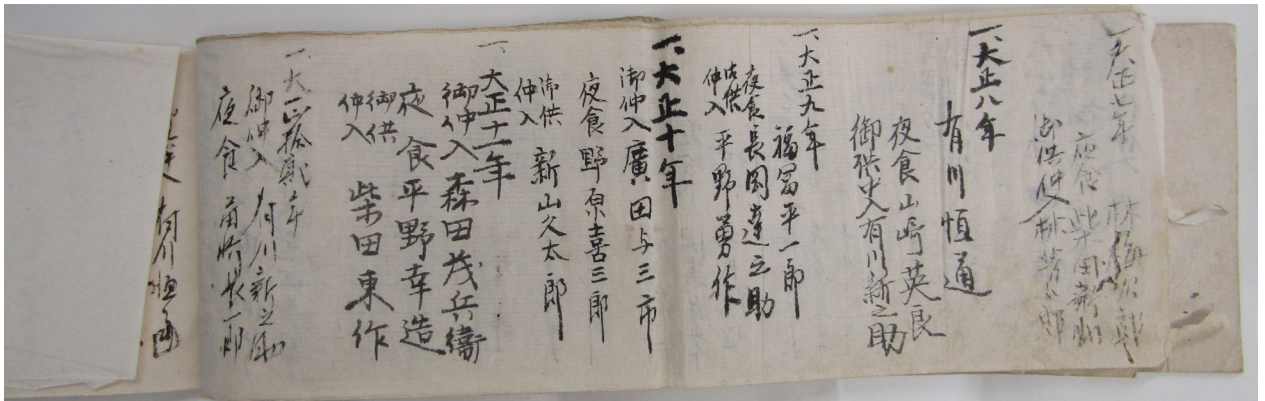
「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 14



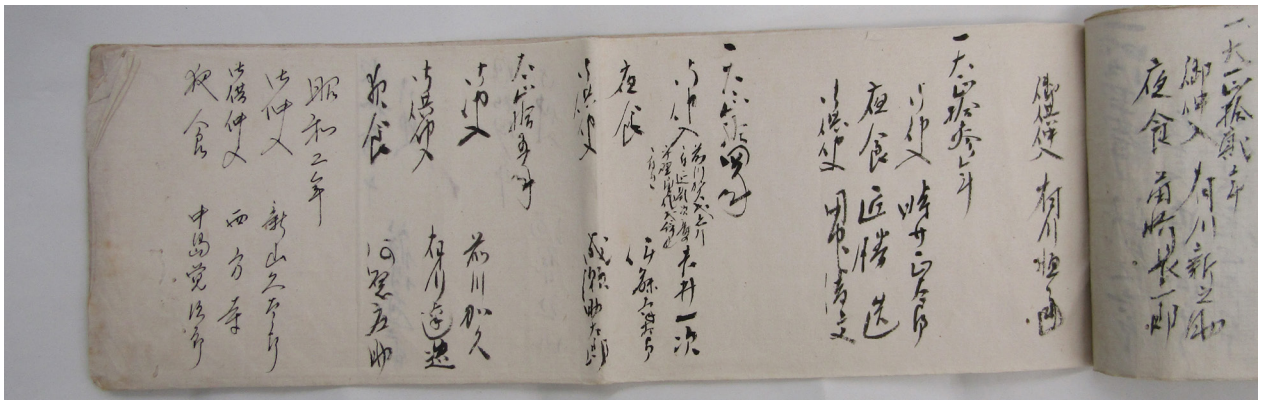
「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 15



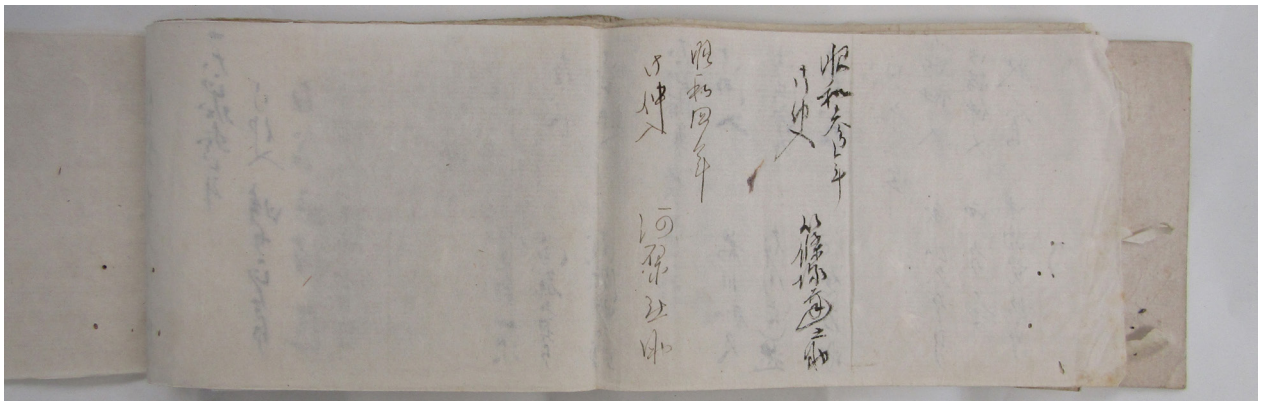
「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 16



「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 17



「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 18



「神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記帳」 19